

204A-1

滿洲ニ於ケル日華衝突ノ概況

一、事變以前ノ一般的情勢

中國人ノ日本人ニ對スル態度ハ近來友好ヲ缺イテ
升タ。此ノ時期ニ至ル迄ニ三百件以上ノ不快ナ性
質ノ事件ガ日華人間ニ發生シタノデアアル。
其ノ最モ顯著ナル事例ハ次ノ通りデアアル。

中國、駐華日本大使ノ承認拒否、

萬寶山事件、

青島事件、

中村大尉殺害事件、

コレ以外ニモ各年七月以來、中國人が日本ノ軍
人及び居民ニ加ヘタ殘虐、侮辱、迫害
事件ガ十二件アル。

客年八月下旬ニ催サレタ中國ノ重立ツタ
 官吏及軍人ノ公式宴會ニ於テ、彼等ハ「一
 戰ヲ交ヘテ日本人ヲ打倒セヨ」トカ「日本兵ハ
 實戰ノ經驗ヲ又クモ中國軍ハ不斷ノ内亂ノ
 爲メ訓練ガ行キ屈イテ居ル」ナドト日本ノコト
 ヲ無遠慮ニ言ツテ我々ヲ侮辱シタ。之ハ
 排日思想ガ公然タル侮日ニ進展シタモノデア
 ルト云フ日本ノ見解ヲ一層確實ナラシムルモ
 デアル。最極點ニ達スル數日前、中國人
 ハ日本人ニ對シ挑戰的態度ヲ採ツタデア
 ル（北兵營長即チ北大營長ノ）第七旅ノ指揮官
 王以哲少將ハ大言壯語シテ部下ニ「現在
 中國ト日本トノ間ニ存スル危局ニ際シテ余

ハ故朝光第(一九二九年露路華衝突ノ際
勇敢ニ戦ツテ戦死シタ人)ノ如キ英雄的役
割ヲ演ジヤウト言ツタ。滿洲各地ニ於テハ
中國ト日本トノ間ニハ必ズ衝突が起リ日本
勢力ハ滿洲カラ驅逐セラレルデアラウト云フ
意味ノ噂が飛ンダ。我々ハ又同様ノ事
件ニ關スル多數ノ報告ヲ信ズベキヲ助カラ
得タノデアル。ソレニモ拘ハラズ、滿洲ニ於ケル日
本軍當局ハ挑戰ニ應ジナイヤウ自制ニ且
ツ中國人ニ對シテ隱忍的態度ヲ維持シタノ
デアル。然レ乍ラ日本側ニ對スル中國側ノ態度
ハ殊ニ滿洲ニ於テ、一層挑發的トナツテキタ。
日華間ノ關係ハ非常ニ緊張ニ來リ、何
時断絶スルカモ知レナイト我々ハ心配シタ程デ

アツタ。 九月十八日 = 日本ノ南滿洲鐵道
ノ一部ヲ爆破シタ中國兵ノ暴逆行爲ハ
現在ノ紛争ヲ發生セシメタ出來事ヲ
アツタ。

5
衝突、原因

衝突、原因ハ勿論非常ニ重大デハアルガ極ク單純デアル。
約四百(ニ及至三個中隊)ヲ殺ヘル中國軍隊ガ中國將校
、下ニ九月十八日午後十時ヲ少シ過ギタ頃北大營(北兵
營)南東、日本南滿洲鐵道、一部ヲ爆破シタ。線路爆
破直後中國兵ハ日本鐵道守備隊ノ一小部隊ヲ攻撃
シ始メ小兵力、日本常駐鐵道守備隊ガ駐屯シテ斗々
柳條溝ニ向ツテ進撃ヲ開始シタ。

註ハ傍線ハ本音訳中尉指揮下、兵六名ヲ意味ス。

同派遣隊ハ直々ニ電話ヲ以テ事件ヲ *the skin - has*
、日本鐵道守備隊ヘ通報シタ。

日本守備隊(歩兵一個中隊)ハ夜闇、中ヲ現場ヘ急
行シタ。日本増援隊、到着ヲ見ルヤ中國軍ハ兵營
(北大營)ヘ走り込シダ。日本軍ハ中國軍ヲ追ッテ
南東ヨリ北兵營ヘ突撃シ、中國軍、頑強ニ抵抗
ヲ數手破シテ胸墻、一角ヲ奪取シタ。

其ノ中ニ二個中隊ヨリ成ル日本鐵道守備隊(奉天

6

駐屯)オニ大隊、主カハ現場へ急行シ北兵營ニ対シ
 協同攻撃ヲ行ツタ。少シ遅レテ守備隊、別、増援隊
 ガ撫順カラ現場ニ到着シタ。僅カ四個中隊、兵ヲ以テ
 シテハ攻撃ガ最善ノ兵法デアツタコトハ充分了解出来
 ル。北大營、中國軍ハ拂曉迄ニ全部驅逐セラレ中國
 兵ニ分配セラレテ半々大量ノ彈藥、手榴彈等ヲ兵營
 ニ遺棄シテ東方へ退却シタ。通例、中國軍ノ習慣デ
 ハ彈藥ハ各中隊、指揮官將校、手中ニ保管アルベキ
 モ、デアツテ緊急、必要、場合ヲ除イテハ兵ニ分配
 サルベキモノデアナイ。

日本ノ鉄道都市奉天駐屯(平田大佐指揮)機關銃若
 干ヲ有スル六箇中隊編成ノ日本軍中二十九聯隊ハ奉天市内外
 ノ中國軍ノ攻撃ヲ開始シ真庭中迄ニ之ヲ總テ驅逐ス
 ベリアラヌル奴力カラシタ。サウシナケレバ同聯隊ハ約一萬五千ノ
 中國軍ト、交戦ヲ餘儀ナクサレタデアロウ。

第二師團長(遼陽ニ師團司令部ヲ持ツ)多門中將
 ハ事件ノ報告ヲ受クルヤ十九日午前一時隸下部隊ニ奉天集
 結ヲ命ジシ。師團主力ハ指定位置ニ集結ヲ完了シ司令
 部ハ遼陽カラ奉天ニ移セリ。

滿洲ニハ張季良元帥麾下ノ中國軍三十三カガ居リ、内十カハ
 長城内側ニ派遣サレ殘餘ノ二十ニカハ滿洲全域ニ駐屯シテ居リト
 ノコトデアル。事件勃發前ニハ砲約四十門ヲ持ツタ約一萬五千、
 中國軍ガ奉天市内外ニ駐屯シテ居リ、一方滿洲ノ日本軍守備
 隊ハ歩兵五千、砲十六門ヲ持ツタ砲兵、鐵道守備隊六箇大
 隊等、約一萬シカ居ナカツタ。關東軍ノ任務ハ關東租借
 地ノ守備ト一千百料ノ南滿洲鐵道ノ保護デアルガ、必要ノ際ニハ、
 軍司令部ハ獨斷ヲ以テ機宜ノ措置ヲ執ル權利ヲ有シテ居タ。
 軍司令部ハ又滿洲在住ノ十七カ、日本人及ビ八十カ、朝鮮人保
 護ノ責任ガアル。此ノ目的達成ノ爲メニハ、日本軍ハ中國、匪賊ノ
 暴虐カラ日本國民ヲ守ルコトガ必要デアル。我々が中國ノ政府軍
 ノ敵對行動ニ對シテ直々ニ自衛手段ヲ執ルベギハ言フヲ俟タナイ。

8

中国軍ト日本軍ノ間ニ戰鬪が起ル場合ニ、我々が先ツカニ爲スベキコトハ、鉄道輸送ノ便ヲ利用シテ、戰略上ノ重要地点ニ南滿洲鉄道沿線各地ニ駐屯スル我が部隊ヲ集結シ、中国軍ヲ奇襲スルコトデアル。斯ウスルコトニヨツテノミ、我々ハ危局ヲ救ヒ駐滿日本軍ノ任務ヲ果スコトが出来ルデアロウ。

其中ニ、遼陽ニ駐屯シテ居ル者ヲ第一師團ノ主力

(歩兵ヲ十旅解隊) 八十九日午前五時奉天ニ

到着。道中ニ市ノ東ヘ急行シテ、中国軍隊ハ

午前八時少シ前ニ城ヨカラ駆逐サレタ。

砲十六門ヲ有スルニ個砲兵中隊カラ成ル、第一師

團ニ属スル日本ノ砲兵解隊(海城ニ駐屯)ハ午

後二時半迄ニ、奉天ノ東北約五哩ノ中国東大

營カラ中国軍隊ヲ攻撃シタ。

重大ナ形勢ヲ報スル各方面カラノ報告ヲ受ケ

テ、滿洲ノ日本関東軍司令官、本庄中將ハ奉

天進傍ニ於ケル中国軍隊ノ有リ得ルキ攻取ノ機

先ヲ制シヨウト決心シタ。同時ニ司令官ハ所在

ノ中国軍隊武装解除ノ方、鳳凰城ト營口ニ

軍隊ヲ派遣シテ、一方、彼ハ旅順ノ日本軍艦ニ、
管口ノ日本居留民保護ヲ要求シ、他方、朝鮮軍
司令官ト連絡ヲ取リテ。

本在中將八午前ニ時旅順ヲ出發シ、正午ニ奉
天ニ到着シテ、彼ハ奉天市外ニ派遣サレテ居テ
日本軍隊ニ、少数ノ兵ヲ警備ノ為中國東大營ニ

残ス外、此ノ日本ノ鉄道都市及ビ其ノ近傍ニ引
揚ケテ命ジテ。日本ノ憲兵ト日本兵ノ一部ガ城
内ノ警備ニ就イテ。

中國軍ニ死傷ハ未ダ確説セザルニ
（前傷一四九名）

大島大佐指揮、六個中隊ト機肉銃若干トヨリ成
 ル日本軍歩兵第四聯隊ハ十九日午後三時自衛上寛城
 子及ビ南嶺ニ在ル中國軍ヲ驅逐セントシタ然シ中國軍
 ハ頑強ニ抵抗シタ。第四聯隊ハ日本軍鉄道守備隊第
 一大隊主力ノ増援ヲ受ケタ。必死ノ戦闘、後遂ニ寛城
 子ハ二十日午前十一時頃、南嶺ハ午後三時頃我方ノ手ニ
 落ケタ。南滿洲鉄道ノ北端タル長春カラ中國軍ヲ驅
 逐シタ後ハ鉄道ハ全ク安全トナツタ。
 本戦闘ニ於ケル日本軍死傷者數ハ左ノ通報告サレタ。

計	奉天附近戦闘	寛城子附近 戦闘	
		將校	死
三		三	將校
		六四	兵
六六	二	三	將校
		八五	兵
一〇	七		傷
一〇四	一九		傷

(負傷一四名、死者六九名)

中國軍ノ死傷ハ未ダ確認セラレズ。

12

三 戰鬥後ノ狀況

吉林駐屯、中國軍が西方ニ向ツテ漸進中ナルト旨ノ長春ヨリノ通報ヲ受ケルヤ、長春ニ在ル日本軍ハ二十日（旅順駐屯）日本軍ヲ三十聯隊主力及び（海城駐屯）第一砲兵大隊ノ増援ヲ受ケケタ。才二師團長多門中將ハ司令部ヲ奉天カラ長春ヘ移シタ。

吉林デハ、反日ノ氣勢カ愈々甚カリ、一部中國人ハ日本人家屋ニ對シ放火スル始末テアツタ。其レ故ニ、九百十一名ヲ數ヘル在留日本人ハ、日本軍當局ニ對シ、即刻若干ノ軍隊ヲ派シテ彼等ノ保護ニ當ラシメル事ヲ請願シタ。師團長ハ、中國軍ノ西進ニ関シテ更ニ情報ヲ受領スルヤ、該地在留日本人保護ノ目的ヲ以テ、二十一日午前十時頃、吉林ニ依リ、吉林ニ向ケ混成旅團ヲ派遣シタ。

夕メニ、長春ニ於テハ少數ノ日本軍隊ガ警告
備¹³、任ニ当ル事ニナツタ。中國吉林軍參
謀長熙洽ハ、日本軍東進云々ノ報ニ痛ク
敬馬キ、何等抵抗スル事ナク日本軍ニ降伏シタ。
日本軍ハ二十日午後六時、事実上一戰ヲモ交
ヘズシテ吉林ヲ占領シタ。テアル。中國軍ハ吉
林城外九哩ノ地莫ニ撤退シタ。吉林、安寧秩
序全ク舊ニ復スルヤ、亦ニ師團主力ハ同市ヲ
撤退シタ。

問島ニ於テハ、日英キノ衝突が起ツテ以來、排
日感情ハ益々高マルニ至ツタ。龍井村テハ中
國人ノ日本人ニ対スル暴行事件が起ツタ。
一部中國暴民ハ日本人新聞賣子が街頭テ
新聞ヲ賣ルノヲ妨害シタ。事態ハ悪化スル許
リテアツタ。暴民ハ日本輕便鐵道車ノ機關
庫ヲ爆破シ、局子街ノ公立女子校ニ放火シタ。

此等ノ暴虐行為ハ共產黨員ニ依リ爲サレ
夕毛ノト言ハレテ居ル。日鮮人ハ中國人ニ依ッ
テ虐殺サレルカモ知レヌト云フ噂ニ敬馬愕シ。
朝鮮軍司令官ニ對シ、彼等ノ生命保護ノ夕
メ、即時若干ノ軍隊ヲ派遣スルヤウ請願シ
タ。二十一日夜半以來、通信ハ絶シ、間島ニ於
ケル事態ノ真相ヲ確メルコトハ不可能ニナッタ。

安東デハ十九日ニ中國ノ砲艦ガ日本軍隊ノ爲ニ
武装解除サレタ。安東カラ電報ニ依レバ若干ノ中

國軍隊ガ東園堡ト劉家台^{ウイ}日本安奉線ニ対

シテ猛烈ノ攻撃ヲ加ヘ電信線ヲ切断シタ。安東奉天

間ノ通信ハ其ノ結果不通トナッタ。僅カニ十名ノ日本鉄

道守備兵ハ中國軍隊ト戦闘ヲ交ヘ鷄冠山ノ鐵道

守備隊ニ救援ヲ求メタ。

一方奉天ノ日本軍当局ハ城内ノ平和ト秩序ヲ回復

シ維持スベクアラユル努力ヲ傾倒シタ。中國ノ一般民

衆ハ日本軍隊ヲ信頼ニテ未タヤウデアッタ。二十日カラ

奉天デハ秩序ガ殆ド平常通りニ恢復シタ。同市

ノ下層階級ニ屈スル多クノ中國人ハ各自ノ任事ニ

復歸ニテ居タ。然シ乍ラ郊外ノ形勢ハ尚不安テ

アッタノテ警戒ガ爲サレテ居タ。二十一日ノ午後十時

頃中國ノ脱走兵ガ再ビ柳條溝附近ノ南滿洲鉄

道線路ヲ破壊シヤウト企テタガ彼等ハ日本ノ鐵道守

備兵ノ爲ニ現場ニ死体五箇ヲ遺棄ニテ撃退サレタ。

16
関東軍司令官、要求ニ依テ朝鮮軍司令官ハ歩
兵五箇大隊、騎兵一箇中隊、砲兵二箇大隊、工兵
一箇中隊等ヨリ成ル増援軍ヲ派遣スルコトニ決意
シタ。朝鮮カラノ増援軍ハ十九日午後十時、各駐屯
地ヲ出發シタ。彼等ハ先ヅ新義州ノニ集結シ二十
一日、正午頃鴨綠江ヲ渡リ、二十一日夜半奉天ニ到
着シタ。日本東京デハ二十二日緊急閣議が開催セ
レ朝鮮カラノ増援軍派遣ヲ承認シタ。

Translated by: WAKADAYASHI Y.

204 A-1

滿洲に於ける日華衝突の概況

一 事變以前の一般的情勢

中國人ノ日本人ニ對スル態度ハ近來友好ヲ欠イ

テ其ノ此ノ期ニ至ル迄間ニ三百件以上ノ

不快ノ性質ノ事件ガ日華人間ニ發生シ來

タノデアル。其ノ最モ顯著ナル事例ハ次ノ通りテ

アル。

中國ノ駐華日本大使ノ承認拒否

萬寶山事件

青島事件

204 A-1
12
2

中村大尉殺害事件

コレ以外ニモ客年七月以來、中國人が日本ノ

軍人及び居住民ニ加へ、夕殘虐、侮辱、迫害事

件が十二件ハアル。

客年八月^{下旬}末ニ催ハレタ中國駐官吏及軍人ノ

公式宴會ニ於テ、^{彼等ハ}一戰ヲ交ヘテ後日本ノ^打倒セヨ

トカ、日本兵ハ實戰ノ經驗ヲ欠クモ^中我國軍

ハ不漸ノ内^{亂ノ爲ニ}能^ガ訓練^ガナドト日本ノ

^{コトヲ無遠慮ニ言テ我々ヲ}侮辱シタ。之ハ排日思想ガ公

然タル侮日ニ進展シタモノデアルト云フ日本ノ^{見解}觀

ヲ一層確實トラシムルモノデア^{極點}ル。最^非期ニ

達スル數日前、^中國人ハ日本ノ對シ^戰挑

204A-1
763
8

的態度ヲ採リテアル。(北兵營即チ北大營ノ)

第七旅)ノ指揮官 王以哲(少將ハ

大言壯語ニテ部下ニ 現在中國ト日本トノ間ニ

存スル(危局)ニ際シテ余ハ故韓光第

(一九二九年 露華)衝突ノ際勇敢ニ戦

ツテ戦死シタ人)ノ如キ英雄的役割ヲ演ジヤウ

ト其部下ニ廣言シタ。 満洲各地ニ於テハ

中國ト日本間ニ(ト)必ず衝突が起リ

嗚ヤ、日本勢力ハ満洲カラ驅逐セラレル(デア)ラウト

(意味ノ)云フ嗚が能レダ。 我々ハ又同様ノ事情ニ関

スルタ多教ノ報告ヲ信ス、ソレモ拘ハラズ、

満洲ニ於ケン日本軍當局ハ

挑戦ニ應ジ

トテ捲キ上ル ナイヤウ自制

此中 204A-1
#4
A

テ隱忍的

對シ電報ニ態度ヲ維持シタリテアム。

然シ

乍ラ

日本側ニ對スル此中 國側ノ態度ハ殊ニ

滿洲ニ於テハ一層挑發的トナワテキタ。日華

間ノ關係ハ非常ニ緊張シ來リ、~~其~~何

時、^{斷絶スル}東亞事件が起ルカモ知レナイト我々ハ心配シタ程

デアワタ。九月十八日ニ日本ノ南滿洲鐵道

ノ一部ヲ爆破シタ哉國中ノ暴逆ノ集規道ヲ行

爲^高軌ハ現在~~進行中~~ノ紛争ヲ發生セシメタ事^{出来}ニ

デアワタ。

其二、衝突の原因

200 A1
785
5
~~Nakayama~~

衝突の原因、勿論非常ニ重大デハアルカ、

極ク単純アル。約四百（ニ乃至三個中隊）ヲ

数ヘル中国軍隊カ中国將校ノ下ニ九月十八日

午后^十時^ヲ過^リキ^タ北大營（北兵營）南東ノ南^{日本}

滿洲鉄道ノ一部ヲ爆破シタ。鉄路^線爆破直後

中国兵甚ハ日本鉄路^道警備隊ノ一小隊^部ヲ

攻撃シ始メ、小兵力ノ日本常駐鉄路^道警備隊カ

駐屯シテ^テ斗^テ夕柳條溝ニ向ツテ進撃ヲ開始シタ。

註ニ傍線ハ河本ノ音訳ニ中尉指揮下ノ兵六名

ヲ意味ス。

同夜遺隊ハ^直警備隊ニ要請ヲ以テ事件ヲ^{No. 1000}

日本鉄道警備隊ハ通報シタ。

204A-1
TT6

日本警備隊（歩兵一団中隊）ハ夜●圍中ヲ

現場ハ急行シタ。日本増援隊ノ到着ヲ見ル

ヤ。中國軍ハ兵營（北大營）ニ走り込マ。

日本軍ハ中國軍ヲ追^{ツテ}南東ヨリ北兵

營ニ突撃シ、~~北~~中國軍ノ頑強ナ抵抗ヲ

撃破シテ胸^牆ノ一隅ヲ^角奪取シタ。

^{其中ニ}廿廿ニ団中隊ヨリ成リ、日本鉄道^守警備隊（奉天

駐屯）第二大隊ノ主力ハ現場ニ急行シ北兵營

ニ對シ協同攻撃ヲ行ツタ。少シ遅レテ、~~警備隊~~

警備隊ノ別ノ増援隊カ撫順カラ現場ニ到着シタ。

僅カ四団中隊ノ兵ヲ以テシテハ攻撃~~が~~最善ノ●兵

法ヲアツタエトハ充分ヲ解^出ス。北大營ノ中國軍ハ

200A1
~~20~~
77
#

辨曉迄ニ全部駆逐セラレ、中國兵ニ分~~配~~配セ

ラレテキタ大量ノ彈薬、手榴彈等ヲ兵營

ニ遺棄シテ東方ニ退却シタ。通例ノ中國軍

ノ習慣ヲハ彈薬ハ各中隊ノ指揮官^官將校ノ手中ニ

保管セラルルニキモ、^{テアツテ}緊急ノ必要ノ場合ヲ除イテ

ハ兵~~ニ~~分~~配~~配^サル^ンニキモ、^{テハ}ナイ。

③ X

~~Translated by T. K. ...~~

204A-1
#8

其由大供指揮ノ日本、鉄道都市奉天

機関銃若干ヲ有ス古箇中隊編成シ

駐屯 日本軍中二十九聯隊ハ奉天市内外

(平田大佐指揮ノ)

ノ中国軍、攻殺手ヲ開始シ札ヲ總ハシ真夜中

之等ヲ總テ
迄ニ駆逐ス
スワク所有
アヲユル
奴カカヲシタ。サウレナケハ

同聯隊ハ約一五五ノ中国軍トノ交戦ヲ

餘儀サレテア
テア
コウ。

第二師團長
奈陽ニ師團司令部ヲ持ツ

團司令部ヲ多門中將ハ報告ヲ受報

クルヤ
隷下部隊ニ
隷下部隊
十九日午前一時 奉天

集結ヲ命ジタ。湖師團主カハ指定

位置ニ集結ヲ完了シ湖司令部ハ奈陽

12

カヲ奉天ニ移サレタ。

滿洲ニハ張學良元帥麾下ノ中国

軍三十三万ガ居リ、内十一万ハ長城内ニ駐シ、

サレ残餘ノ二十万ハ滿洲全域ニ駐シ、

テ居タトコトデアル。事件勃発前ニハ砲

約四十内ヲ持ツタ約一万五千ノ中国軍ガ

奉天市内外ニ駐シ、~~配軍~~ 一方ハ滿洲ノ日

本軍ノ守備隊ハ歩兵五千、砲十六内ヲ持

ツタ砲兵、鉄道守備隊六箇大隊等ノ

約一万シカ^{ハ居ナカタ}。察東軍、任務ハ察

東租借地ノ守備ト一千百料ノ南滿洲

鉄道ノ保護デアルガ、必要ノ際ニハ備

200A-1
29
19

3

獨斷ヲ以テ機宜

軍最高指揮官ハ臨機ハ措置ヲ執ル權利ヲ

有シテ居タ

軍司令

又

留保スル。軍最高指揮官ハ北滿洲在住ノ

十七万ノ日本人及ビ八万ノ朝鮮人保護ノ責

任カアル。此ノ目的達成ノ爲メニハ日本軍ハ東

中國ノ匪賊ノ

國民

賊ヲ是れ虐カラ日本兵ヲ守ルコトガ必要アリ

我々が中國ノ政府軍ノ敵對行動ニ對シテ直々ニ自衛手段ヲ執ルベキハ言フヲ俟タナイ。

ル。中國軍ト日本軍ノ内ニ戰鬪ガ起ル

場合ニ我々が先ヅヤ一ニ爲スヤキコトハ、鉄

道輸送ノ便ヲ利用シテ、戰略上ノ重要地点

ニ南滿洲鐵道沿線各地^{ハニ駐屯スル}我々が部

隊ヲ集結シ、中國軍ヲ奇襲スルコトデアリ。

スルコトニ依ツテノミ、

斯ウレ^ル中^ル我々ハ危局ヲ救ヒ駐滿日

本軍ノ任務カヲ果サスコトガ約束^テス。

204A-1
2/10
10

カ

204A1
11
H. J. K...
11.

其ノ中ニ遼陽ニ駐屯スル唐多中二師團ノ主力(歩

兵才十六師隊)ハ十九日午三時至時奉天ニ到着

直々ニ市ノ東へ急行シテ、中国軍隊ハ午前八時

少シ前ニ此城^{城内}内^砲門ヲ有スル^砲方^砲向^砲カ^砲ラ^砲驅逐サシタ^砲也

(砲兵) 中国軍隊ヲ破^砲ル^砲日本ノ砲兵部隊

(海城ニ駐屯)ハ午後二時半迄ニ奉天ノ東北

子哩ノ中国東大官^{カラ}中国軍隊ヲ^{撃攘}破^{シタ}ル

重大ナル形勢ヲ報スル各方面カラノ報告ヲ受ケテ

滿洲ノ日本國東軍司令官本庄中將ハ奉天

川^傍郊ニ於ケル中国軍隊ノ攻撃ノ接近ヲ制^{有リ得ヘキ}シヨウ

ト決心シタ、同時ニ司令官ハ中国軍隊武装解

除ノ后鳳凰城ト營口ニ軍隊ヲ派遣シタ、一方彼ハ

旅順ノ日本軍艦ニ、堂口ノ日本居民保護ノ要

求レ他方、朝鮮軍司令官ト連絡ヲ取ラタ。

本庄中将ハ午前十時旅順ヲ出発シ正午ニ

奉天ニ到着シタ。 ^{彼ハ}奉天市外ニ巡邏サレテ居タ回

本軍隊ニ、少數ノ兵ヲ致言備ノ為中國東大營

ニ殘ス外、^{此ノ}日本ノ鉄道都市及心甚ノ止 ^傍隣ニ引揚ゲ

ツ命じタ。日本ノ憲兵ト日本兵ノ一部カ ^{城内} ~~其ノ~~ 林ノ

致言備ニ就イタ。

200A-1
~~25~~
/2

(A)

204 A-1
13

~~Handwritten signature~~

13

大島大佐指揮ノ

六個中隊ト機関銃若干ヨリ成ル日本軍歩兵第四聯隊

ハ十九日午後三時自衛上寛城子及び南嶺ニ在ル東那軍

ヲ驅逐セントシタ。然シ其那軍ハ頑強ニ抵抗シタ。第四聯隊

ハ日本軍鉄道守備第一大隊主力ヲ増援ヲ受ケタ。必

死ノ戦闘ノ後、遂ニ寛城子ハ二十日午前十一時頃、南嶺ハ

午後三時頃我方ノ手ニ落ナタ。南滿洲鉄道ノ北端

ニタル長春カラ中國軍ヲ驅逐後ハ全ク安全トナツ

夕

本戦闘ニ於ケル日本軍死傷者數ハ左ノ如キモノナリ

報告サレタ。
備ハナシ

本

寬城子附近戦闘

將校

兵

將校

兵

死

傷

三

六四

三

八五

奉天附近戦闘

二

七

一九

計

三

六六

一〇

一〇四

(負傷一四名、死者六九名)

中國軍死傷ハ未カ確認セラレズ

200A-1
27/14

14

⑤

三、戰鬪後ノ狀況

吉林駐屯ノ中國軍ガ西方ニ向ツテ漸

進中ナル七日ノ長春ヨリノ通報ヲ受ケ

ルヤ長春ニ在ル日本留兵ハ旅順駐屯

ノ日本留兵ヲ三十聯隊主カ及ビ海城駐

屯ノ第一砲兵大隊ニ増援ヲ受ケタ

至シタ。ホニ師団長タ多ク中將ハ前

司令部ヲ奉天^{カラ}長春ヘ移シタ。

吉林テハ反日ノ氣勢カ愈々衰カリ一部

中國人ハ日本人ノ家屋ニ對シテ放火スル始

末デアツタ。其^其故ニ、九百十一名ヲ數ヘル在留^{日本}

204A-1
28/15
S. SHIRAWA

200 A-1
9/16

16

人ハ日本軍當局ニ対シ、即刻、若干ノ

軍隊ヲ派シテ、彼等ノ保護ニ当ラシ

タル事ヲ請願シタ。師団長ハ中国軍

西進ニ関スル更ニ後ハ情報ヲ受領スルヤ

該地在留^{日本}人^{保護}ノ^{目的ヲ以テ}二十一日~~午後~~前

十時頃、吉長^{鐵道}ニ依リ、吉林ニ向ケ

混成旅団ヲ派遣シタ。タメニ、長春日ニ於

テハ、少數ノ日本軍隊ガ警戒備ノ任ニ當

ル事トナツタ。中国吉林軍參謀長^配

洽ハ、日本軍東進ニ云々ノ報ニ痛ク、^驚馬キ

何等抵抗スル事ナク、日本軍ニ降伏シタ。

200 A1
~~30~~ 17
17

日本軍ハ二十一日午後~~前~~^後六時、事~~實~~上ニ一戦ヲモ

交ヘズシテ吉林ヲ占領シタノデア~~ル~~。中国軍

ハ吉林城外九哩ノ地~~ニ~~撤退シタ。吉林

ノ安寧秩序人王ク舊日ニ復スルヤ、カニ師團

主力ハ同市ヲ撤退~~シ~~^{シタ}。

間島~~ニ~~於テハ、日~~共~~キ、衝突大ダ起ツテ以來

排日感情ハ益々高マルニ至ツタ。龍井村

デハ中国人~~ノ~~^{日本}人ニ対スル日暴行事件が起ツ

タ。一部中国暴民ハ~~人~~^{日本}新聞~~報~~^賣ル子が街

頭デ新聞ヲ~~土~~ルノヲ妨害シタ。事~~態~~ハ悪心

化又ル許リテアツタ。暴民ハ日本~~軍~~輕便鉄

4-

道ノ棧間庫ヲ爆破シ、局子街ノ公立学校

ニ火ヲ放シ、此等ノ暴虐行爲ハ共產

黨員ニ依リ爲サレタモト由シ立テ居ル

井ル。曰、鮮人ハ中国人ニ依ッテ虐殺サレル

カモ知レヌト云フ、噲ニ敬馬愕シ、朝鮮軍

司令官ニ対シ、彼等ノ生命ヲ保護ノタメ、即

時、若干ノ軍隊ヲ派遣スルヤウ請願シタ。

二十一日夜半以来、通信ハ杜絶シ、青島ニ

於ケル事能ハ、真相ヲ確メ、トハ不可能ニナ

シタ。

204A-1

3/18

18

Translated by AZUMA

204A) 22 19 19

① 支那東部の、中國人の砲艦が日本軍隊、爲に武装解除

サレタ。 支那東部の、電報に依るに、
若干、
或る、
中國

軍隊が東園堡に劉、
定好台に日本、
奉天、
日本軍

猛攻、
電報線を切斷し、
支那奉天

通信、
向、
其、結果不通トナリタ。 日本 鉄道守備

兵、中國軍隊と戦闘ヲ交へ、
鶏冠山、
鉄道守備隊ニ

救援ヲ求メタ。

一方、奉天、日本軍、各局ハ城内、平和ト秩序ヲ

回復シ維持スベク、
努力ヲ傾倒シ、
中國一般

民衆ハ日本軍隊ヲ信頼シテ来、
タヤラフアツタ。 二十日カラ

奉天デハ秩序ガ、
治ト平常通リ、
秩序ガ、
同市ノ

下層階級ニ居スル中口人ハ各自ノ仕事ニ復帰シテ居タ。

204 A-1
23
20
20

此ニ午ヲ、郊外ノ形勢ハ為不字テアワタケ警戒ガ及サレ

テ居メ、千日ノ午後十時頃、中國ノ脱走兵ガ再ビ

柳條溝附近、南滿洲鉄道線ヲ破壊シヤウト企テメカ、

彼等ハ日本鉄道守備兵ハ為ニ撃退サレ、現場ニ死体五箇

ヲ遺棄シテ撃退サレメ。

南東軍司令官ノ要求ニ依テ朝鮮軍司令官ハ歩兵

五箇大隊、騎兵一箇中隊、砲兵二箇大隊、工兵一箇中

隊ヨリ成心^増援軍ヲ派遣スルニトニ決意シメ、朝鮮カラノ

増援軍ハ十九日午後十時各駐屯地ヲ出發シメ、彼等ハ先ヅ新義州ニ

ニ集結シ二十一日ノ正午頃鴨綠江ヲ渡河シ、二十一日夜半奉天ニ到着シメ

日本東京テハ二十二日緊急閣議ガ開催サレ、朝鮮カラノ増援軍派遣ヲ

承認シメ。

滿洲ニ於ケル日華衝突ノ概況
一、事變以前ノ一般的情勢

中國人ノ日本人ニ対スル態度ハ近來友好ヲ欠ケテ斗々。此ノ時期ニ至ル迄ニ三百件以上ノ不快ノ性質ノ事件ガ日華人間ニ發生シタリテアル。其ノ最モ顯著ナル事例ハ次ノ通りテアル。

中國ノ駐華日本大使ノ承認拒否

萬寶山事件

青島事件

中村大尉殺害事件

コレ以外ニモ客年七月以來、中國人が日本ノ軍人及居住民ニ加ヘテ殘虐、侮辱、迫害事件ガ十二件アル。

客年八月下旬ニ催セタ中國ノ重立ツタ官吏及軍人ノ公式宴會ニ於テ、彼等ハ「一戰ヲ交テ日本人ヲ打倒セヨトカ」日本兵ハ實戰ノ經驗ヲ欠クモ中國軍ハ不斷ノ内亂ノ為ニ訓練ガ行キ届イテ居ルナドト日本ノユトヲ無遠慮ニ言ワテ我々ヲ侮辱シタ。之ハ排日思想ガ公然タル侮日ニ進展シタモノテアルト云フ日本ノ見解ヲ一層確實トラシムルモノナル。最極矣ニ達スル數日前中國人ハ日本人ニ対シ挑戰的ノ態度ヲ採リタリ。(北兵營即チ北大營第七旅ノ指揮官 王以哲少將ハ大言壯語シテ部下ニ「現在中國ト日本ト間ニ存スル危局ニ際シテ余ハ故韓光第(一九二九年露華衝突際勇戦ニ戦フテ戦死シタ人)如キ英雄的役割ヲ演シヤウト

滿洲ニ於ケル日華衝突ノ概況
一、事變以前ノ一般的情勢

中國人ノ日本人ニ對スル態度、近來友好ヲ欠キテ、
此時期ニ至ル迄ニ三百件以上ノ不快ノ事實ノ事件ガ
日華人間ニ發生シテ來ル。其ノ最モ顯著ナル事例ハ
次ノ通りデアル。

中國、駐華日本大使、承認拒否

萬寶山事件

青島事件

中村大尉殺害事件

コレ以外ニモ、客年七月以來、中國人が日本、軍人及在
住民ニ加ヘテ、殘虐、侮辱、迫害、迫害事件ガ十件有リ。

客年八月下旬ニ催セタリ中國、重立ツク官吏及軍人
ノ公式宴會ニ於テ、彼等ハ「一戰ヲ交シ日本人ヲ打倒ス
トカ、日本兵ハ實戰ノ經驗ヲ欠クモ中國軍ハ不斷ノ
内亂ノ爲ニ訓練ガ行キ居テ居ル」ナドト日本ノコトヲ
無遠慮ニ言ツテ我々ヲ侮辱シタ。之ハ排日思想ガ公然
タル侮日ニ進展シタモノデアルト云フ日本ノ見解ヲ一層
確實トラシムルモノデアル。最極美ニ違ヒテ數日前中國人
ハ日本人ニ對シ挑戰的態度假ヲ採リタ事也。(北兵營
即チ北大官軍第七旅ノ指揮官 王以哲少將ハ大言
壯語シテ部下ニ「現在中國ト日本ト間ニ存スル危局ニ
際シテ余ハ故韓光第(一九二九年)露華衝突際勇
敢ニ戰ツテ戰死スル人、如キ英雄的役割ヲ演ビタラト

言ワタ。滿洲各地ニ於テハ中國ト日本ト間ニ衝突
が起リ、日本勢力ハ滿洲カラ驅逐セラレルテアラウト云フ
意味ノ噂が飛ビタ。我々ハ又同様ノ事件ニ関スル多數
報告ヲ信スベキハ助カラ得タノナル。

ソレニモ拘ワラス、滿洲ニ於テ日本軍當局ハ挑戰ニ應
ジナイヤウ自制シ、且ツ中國人ニ對シテ隱忍的態度ヲ
維持シタノナル。然レ乍ラ日本側ニ對スル中國側ノ
態度ハ殊ニ滿洲ニ於テ、一層挑発的トナワテキタ。
日華間ノ關係ハ非常ニ緊張シ来リ、何時断絶
スルカモ知シナイト我々ハ心配シタ程デアツタ。九月十八日ニ
日本ノ南滿洲鐵道ノ一部ヲ爆破シタ中國兵ノ暴逆
行為ハ現在ノ紛争ヲ發生セシメタ出来事デアツタ。

二、衝突ノ原因

衝突ノ原因ハ勿論非常ニ重大デアルガ、極ク單純
アル。約四百(二乃至三個中隊)ヲ數ヘル中國軍隊ガ
中國將校ノ下ニ九月十八日午五時ヲヤレ過ギタ頃、
北大營(北兵營)南東ノ日本南滿洲鐵道ノ一部ヲ
爆破シタ。線路爆破直後中國兵ハ日本鐵道守備
隊ノ一小部隊ヲ攻撃シテ始メ、小兵力ノ日本守備駐
鐵道守備隊ガ駐屯シテキタ柳條溝ニ向ツテ進撃
ヲ開始シタ。

註ニ傍線ハ河本音訳中尉指揮下ノ兵六名ヲ意味ス
同派遣隊ハ直チニ電話ヲ以テ事件ヲKe-shin-kanノ
日本鐵道守備隊ヘ通報シタ。

言ワタ。滿洲各地ニ於テハ中國ト日本ト間ニ衝突
ガ起リ、日本勢力ハ滿洲ニ驅逐セラルルヲ以テワト云フ
意味ノ噂ガ飛ビテ。我々ハ又同様ノ事件ノ肉スル者歟
報告ヲ信スベキハ助ケテ得クノ事ナシ。

ソレニ拘ハラズ、滿洲ニ於テハ日本軍當局ハ挑戰ニ應
ジテイヤワ自割リ。且ツ中國人ニ對シテ隱忍ノ態度ヲ
維持シテ居ラレド。然レテ下リ日本側ニ對スル中國側ノ
態度ハ殊ニ滿洲ニ於テ、一層挑発的トナリテ居リ。
日華間ノ關係ハ非常ニ緊張シ来リ、何時斷絶
スルカ之起リト我々ハ心配シテ居リ。九月十八日ニ
日本、南滿洲鐵道ノ一部ヲ爆破シテ中國兵ヲ暴逆
行為ニ現在、終年ヲ登生セシメテ出立事ナラシメテ。

二、衝突ノ原因

衝突ノ原因ニ論非字ニ重天ガハルガ。極ク早急
アル。約四百(二乃至三個中隊)ヲ數ヘテ中國軍隊ガ
中國特校、下ニ九月十八日午六時カケテ過リ、
北大營(北兵營)南東、日本南滿洲鐵道ノ一部ヲ
爆破シ、線路爆破直後中國兵ハ日本鐵道守備
隊ノ一部隊ヲ攻撃シ、始メ小兵力ノ日本守備隊
鐵道守備隊ガ駐屯シテ居リ。柳條溝ニ向テ進軍
ヲ開始シ。

No2
註日備隊ハ河車音訊申付指揮下ノ兵隊ガ責
同派遺隊ハ直ニ電話ヲ以テ事件ヲ報告シ、
日本鐵道守備隊ヘ通報シ。

日本守備隊（歩兵一個中隊）ハ夜間ノ中ヲ現場（急行）ニ到着シ、日本増援隊ノ到着ヲ見ヤ、中國軍ハ兵營（北大營）ヘ走リ込ニク。日本軍ハ中國軍ヲ追ツテ南東ヲ向テ北兵營ヘ突撃シ、中國軍ノ頑強ニ抵抗ヲ撃破シテ胸牆ノ一角ヲ奪取ス。

其ノ中ニ二個中隊ヲ成ル日本鐵道守備隊奉天駐屯）第二大隊ノ主力ハ現場ヘ急行シ北兵營ニ對シ協同攻撃ヲ行ツ。少シ遲テ守備隊ノ別ノ増援隊ガ撫順ヲ向テ現場ニ到着シタ。僅カ四個中隊ノ兵ヲ以テテハ攻撃ガ最善ノ兵法デアツタコトハ充分了解出来ル。北大營ノ中國軍ハ拂曉迄ノ全部驅逐セシ中國兵ニ分配セラレテタタ大量ノ彈藥、手榴彈等ヲ兵營ニ遺棄シテ東方ヘ退却シタ。通例ノ中國軍ノ習慣テハ彈藥ハ各中隊ノ指揮官將校ノ手中ニ保管サレベキモノデアツタ。緊急ノ場合ヲ除キテハ兵ニ分配サルベキモノデアライ。

日本ノ鐵道都市奉天駐屯（平田大佐指揮）機銃若干ヲ有スル六箇中隊編成ノ日本軍第二十九聯隊ハ奉天市内外ノ中國軍ノ攻撃ヲ開始シ、晝夜中迄ニ之等ヲ總テ驅逐スベクアラユル努力ヲタサシメテ同聯隊ハ約一萬五千ノ中國軍トノ交戦ヲ餘儀ナクセタデアロウ。

第二師團長（遼陽ニ師團司令部ヲ持ツ）多内中將ハ事件ノ報告ヲ受ケルヤ十九日午前一時隸下

日軍守備隊（歩兵一個中隊）ハ夜間、中ノ現場（志行）ニ、日本増援隊、到着ヲ見セ、中國軍ハ兵營（北大營）ヘ至リ込ニテ、日本軍ハ中國軍ヲ追フテ南東方ニ北兵營ヘ突撃シ、中國軍、頑強ニ抵抗ヲ擊破シ胸墻、一月ヲ奪取ス。

其、中ニ二個中隊ヲ成シ、日軍鐵道守備隊奉天駐屯（第二大隊）主力ハ現場ヘ急行シ北兵營ニ対シ協同攻撃ヲ行ツテ、少シ遲シテ守備隊別、増援隊カ撫順ニ現場ニ到着シテ、僅カ四個中隊ノ兵ヲ以テシテハ攻撃ガ最善、兵法ヲアツテトハ充テテ解出スル。北大營ノ中國軍ハ拂曉迄、全部駆逐セシ中國兵ニ分配セラレテ、大量ノ彈藥、ヲ榴彈等、兵營ニ遺棄シテ、東方ヘ退却シテ、通例、中國軍ノ習俗、ハ彈藥ハ各中隊ノ指揮官將校、手中ニ保管セラル、モノデ、緊急ハ必要、場合、除キハ兵ニ分配ガルヘ、モノデ、ハナイ。

日本、鐵道部、奉天駐屯（平田大佐指揮シ）機關銃若干ヲ有シ、六箇中隊編成、日軍軍、第二十九聯隊ハ奉天市内外、中國軍、攻撃ヲ開始シ、真夜中迄、之ヲ總ニ駆逐スヘク、アツテ、苦力ヲ、テ、シテ、同聯隊ハ約、一、五、千、ノ、中國軍、ト、交戦、シ、餘儀、ナシ、テ、ア、リ、。

第二師團長（遼陽ニ師團司令部ヲ持ツ）管内中將ハ事件、報告ヲ受ケ、十九日午前、師團下

部隊ニ奉天集結ヲ命じタ。師團主力ハ指定位置ニ集結ヲ完了シ司令部ハ遼陽カラ奉天ニ移セタ。

滿洲ニ張學良元帥麾下ノ中國軍三十三万カ居テ、内十一万ハ長城内側ニ派遣セテ殘餘ノ二十二万ハ滿洲全域ニ駐屯シテ居タトノコトデアル。事件勃發前ニ砲約四十内ヲ持ツタ約一万五千ノ中國軍カ奉天市内外ニ駐屯シテ居タ。一方滿洲ノ日本軍守備隊ハ歩兵五千、砲十内ヲ持ツタ砲兵、鐵道守備隊六箇大隊等、約一万カ居テカワタ。同車軍ノ任務ハ同車租借地ノ守備ト一千百料ノ南滿洲鐵道ノ保護デアルガ、必要ノ際ニハ軍司令官ハ獨斷ヲ以テ機宜ノ措置ヲ執ル權利ヲ有シテ居タ。軍司令官ハ又滿洲在住ノ十七万ノ日本人及ビ八十万ノ朝鮮人保護ノ責任カアル。此ノ目的達成ノ爲メニハ日本軍ハ中國匪賊ノ暴虐カラ日本國民ヲ守ルコトガ必要デアル。我々ハ中國ノ政府軍ノ敵対行動ニ対シテ直々ニ自衛手段ヲ執ルベキハ言フヲ俟タナイ。中國軍ト日本軍ノ間ニ戰鬪カ起ル場合ニ、我々が先ヅ第一ニ為スベキコトハ、鐵道輸送ノ便ヲ利用シテ、戰略上ノ重要地点ニ南滿洲鐵道沿線各地ニ駐屯スル我カ部隊ヲ集結シ、中國軍ヲ奇襲スルコトデアル。斯ウスルコトニ依ツテノミ、我々ハ危局ヲ救ヒ駐滿日本軍ノ任務ヲ果スコトガ出来ルデアロウ。

其ノ中ニ、遼陽ニ駐屯シテ居タ第二師團ノ主力（歩兵第十六聯隊）ハ十九日午前五時奉天ニ到着、

部隊一奉天集結ヲ命ジタ。師團主力ハ指定位置ニ集結ヲ完了シ司令部ハ遼陽ヨリ奉天ニ移セタ。

滿洲ニ張學良元帥麾下、中國軍三三万カ居リ、内十一万ハ長城内側ニ派遣セテ殘餘ノ二二万ハ滿洲全域ニ駐屯シテ居タトコトナル。事件勃發前ニ砲約四十門ヲ持ツタ約一万五千ノ中國軍ハ奉天市内外ニ駐屯シ居タ。一萬滿洲ノ日本軍守備隊ハ步兵五千、砲十六門ヲ持ツタ砲兵、鐵道守備隊六箇大隊等、約一万カ居リカワタ。同車軍ノ任務ハ同車租借地、守備ト一千百斤、南滿洲鐵道ノ保護ナルカ。必要ノ際ニ軍司令官ハ獨斷ヲ以テ機宜ノ措置ヲ執ル權利ヲ有シ居タ。軍司令官ハ又滿洲在住ノ十万人ノ日本人及ビ八十万ノ朝鮮人保護ノ責任ナル。此ノ目的達成ノ爲メハ日本軍ハ中國之賊ノ暴虐ヨリ日本國民ヲ守ルコトカ必要ナル。我々中國ノ政府軍、敵對行動ニ行ヒ直ニ自衛手段ヲ執ルベキハ言フコトナシ。中國軍ト日本軍、同ニ戰闘カ起ル場合ニ我々が先ヅ第一ニ為スベキコトハ鐵道輸送ノ便ヲ利用シテ戰略上ノ重要地点ニ南滿洲鐵道沿線各地ニ駐屯スル我々部隊ヲ集結シ、中國軍ヲ奇襲スルコトナル。斯ウスルコトニ依ツテノミ、我々ハ危局ヲ救ヒ駐滿日本軍ヲ任務ヲ果スコトガ出来ルデアロウ。

其中ハ遼陽ニ駐屯シ居タ第二師團ノ主力（步兵第六聯隊）ハ十九日午前五時奉天ニ到着。

直千二市ノ車ヘ急行シタ。中國軍隊ハ年前八時方ニ
前ニ城内カラ駆逐セタ。砲十内ヲ有ス。四個砲兵中隊
カラ成ル第二師團ニ屬ス。日本ノ砲兵聯隊(海城ニ駐屯)
ハ年後二時半迄ニ、奉天ノ東北約五哩ノ中國東大營
カラ中國軍隊ヲ數千擡タ。

重大ナ形勢ヲ報スル各方面カラノ報告ヲ受テ滿洲
ノ日本陸軍軍司令部、本庄中將ハ奉天近傍ニ於テ
中國軍隊ノ有リ得ベキ攻撃ノ機先ヲ制シヨウト決
シタ。同時ニ司令部ハ所在ノ中國軍隊武装解除ノ
為鳳凰城ト管口ニ軍隊ヲ派遣シタ。一方彼ハ旅順
日本軍艦ニ、呂口ノ日本居留民保護ヲ要求シ、他方
朝鮮軍司令部ト連絡ヲ取リタ。

本庄中將ハ年前三時旅順ヲ出發シ、乙午ニ奉天ニ
到着シ、彼ハ奉天市外ニ派遣セテ居タ。日本軍隊ニ
少数ノ兵ヲ警備ノ為中國東大營ニ残ス外、此日本ノ
鐵道都市及ビ其ノ近傍ニ引揚ケテ命ジタ。日本ノ
憲兵ト日本兵ノ一部ハ城内ノ警備ニ就イタ。

直十二時、東へ発行シテ、中國軍隊ハ午前八時、
前二城内ヲ驅逐セリ。砲十六門ヲ有ス。四個砲兵中隊
カラ成ル第二師團ニ屬ス。日本砲兵聯隊(海城ニ駐屯
ハ午後二時半迄)奉天ノ東北約五哩ノ中國東大營
カラ中國軍隊ヲ數千擧ガ

重大ナ形勢ヲ報スル各方面カラノ報告ヲ受テ滿洲
ノ日本陸軍軍司令部、本庄中將ハ奉天近傍ニ於テ
中國軍隊ノ有リ得ヘテ攻撃ヲ機先ヲ制シヨウト決
シタ。同時ニ司令部ハ所在、中國軍隊武裝解除ノ
為鳳凰城ト管口ニ軍隊ヲ派遣ス。一方彼ハ旅順
日本軍艦ニヨリ口ノ日本居留民保護ヲ要求シ他方
朝鮮軍司令部ト連絡ヲ取リタ。

本庄中將ハ午前二時旅順ヲ出發シ正午ニ奉天ニ
到着シ、彼奉天市外ニ派遣セラ居タ日本軍隊ニ
少數ノ兵ヲ警備ノ為中國東大營ニ残ス外、此日本ノ
鐵道都市及ヒ其ノ近傍ニ引揚ガリ命ジタ。日本ノ
憲兵ト日本兵ノ一部、城内ノ警備ニ就イタ。

大島大佐指揮六個中隊十機用銃若干より成り日本軍歩
 兵第四聯隊ハ十九日午後三時自衛上寛城子及山南嶺
 二在ル中國軍ヲ驅逐セントシタ然レ中國軍ハ頑強ニ抵抗シテ
 第四聯隊ハ日本軍鐵道守備隊第一大隊主力ノ増
 援ヲ受ケタ。ゆヰノ戰鬪ノ後遂ニ寛城子ハ二十日午前
 十一時頃南嶺ハ午後三時頃我方ノ手ニ落ケタ。南滿洲
 鐵道ノ北端タル長春カラ中國軍ヲ驅逐シタ後ハ鐵道
 ハ全ク安全トシタ。本戰鬪ニ於テ日本軍死傷者數ハ
 左通報告セラル。

寛城子附近戰鬪	將校	死	兵	將校	傷	兵
三	三	六四	三	八五		
奉天附近戰鬪	二	七	一九			
計	三	六六	一〇	一〇四		

中國軍ノ死傷ハ未ダ確認セラズ
 (負傷二四名 死者六九名)

大島大佐指揮、六個中隊十機用銃若干より成り日本軍歩
兵第四聯隊八十九日午後三時自衛上寛見城子及び南嶺
二在り中國軍より驅逐せしむる然し中國軍は頑強ニ抵抗す
第四聯隊ハ日本軍鉄道守備隊第一大隊主力ノ増
援ヲ受ケテ、助死ノ戦鬪ノ後、遂ニ寛見城子ハ二十日午前
十一時頃、南嶺ハ午後三時頃、我々ノ手ニ落ケテ、南滿洲
鉄道ノ北端タル長春カラ中國軍ヲ驅逐シテ後ハ鐵道
ハ全ク安全トナリ、本戦鬪ニ於ケル日本軍死傷者數ハ
左ノ通報トナリ

寛見城子附近戦鬪		奉天附近戦鬪	
將校	死	將校	死
三	六四	三	六六
兵	將校	兵	將校
三	八五	七	一〇
二	一九	一〇	一〇四
計		計	
三		三	

中國軍ノ死傷ハ未ク確認セラレズ
(負傷二四名、死者六九名)

三 戰鬪後ノ狀況

吉林駐屯ノ中國軍カ西方ニ向テ漸進中ナリ旨ノ
 長春ヨリノ通報ヲ受ケルヤ長春ニ在ル日本軍ハ二十日
 (旅順駐屯ノ)日本軍第三十聯隊主力及ヒ(海城
 駐屯ノ)第一砲兵大隊ノ増援ヲ受ケタリ第二師團長
 多門中將ハ司令部ヲ奉天カラ長春ヘ移シタリ

吉林カハ反日氣執力愈々莫カリ一部中國人ノ日本
 人家屋ニ対シ放火スル始末ヲアワタリ其ノ故ニ九百十
 (名)ヲ數ヘル在留日本人ハ日本軍當局ニ対シ即刻
 若干ノ軍隊ヲ派シテ彼等ノ保護ニ當ラセラル事ヲ請
 願シ師團長ハ中國軍ノ西進ニ関シテ更ニ情報ヲ
 受領スヤ該地在留日本人保護ノ目的ヲ以テ二十日
 午前十時頃吉長鐵道ニ依リ吉林ニ向テ混成
 旅團ヲ派遣シタリタニ長春ニ於テ少數ノ日本
 軍隊カ警戒備ノ任ニ當ル事トナリテ中國吉林軍營ノ
 謀長配冷ハ日本軍東進云々ノ報ニ痛ク驚キ
 何等抵抗スル事ナク日本軍ニ降伏シタリ日本軍ハ二
 十日、午後六時、事實上、一戰ヲモ交ヘスレテ吉林
 ヲ占領シタリル中國軍ハ吉林城外九哩ノ地處ニ撤
 退シタリ吉林ノ治安秩序全ク舊日ニ復スル事第二
 師團主力ハ同市ヲ撤退シタリ

間島ニ於テハ、日華ノ衝突カ起リ以來排日感情ハ益
 々高ルニ至リタリ龍井村カハ中國人ノ日本人ニ対スル暴
 行事件カ起リタリ一部中國暴民ハ日本人新聞賣子

三 戰鬪後ノ狀況

吉林駐屯ノ中國軍ハ西方ニ向テ漸進中ニ在リ、
 長春ヨリ通報ヲ受ケルヤ、長春ニ在ル日本軍ハ二十日
 (旅順駐屯ノ)日本軍第三十聯隊主力及ヒ(海城
 駐屯ノ)第一砲兵大隊ノ増援ヲ受ケテ第二師團長
 多門中將ハ司令部ヲ奉天カラ長春ヘ移シテ
 吉林ヲ反日氣勢カ愈々莫大ニ一部中國人ノ日本
 人家屋ニ對シ放火スル始末ヲ以テ、其ノ故ニ九百十
 一名ノ數ハ在留日本人ハ日本軍當局ニ對シ即刻
 若干ノ軍隊ヲ派シテ保護ニ當ラシメ、事ヲ請
 願シ、師團長ハ中國軍ノ西進ニ固シク更ニ情報ヲ
 受領スルヤ該地在留日本人保護ノ目的ヲ以テ二十日
 午前十時頃、吉長鐵道ニ依リ、吉林ニ向テ混成
 旅團ヲ派遣シタリ。長春ニ於テハ少數ノ日本
 軍隊カ警備ノ任ニ當リ、事トシテ中國吉林軍營
 謀長既冷ハ日本軍東進云々ノ報ニ痛ク驚キ、
 何等抵抗スル事ナク日本軍ニ降伏シタリ。日本軍ハ二
 十日、午後六時、事實上、一戰ヲモ交ヘズ、吉林
 ヲ占領シタリ。中國軍ハ吉林城外九哩ノ地ニ撤
 退シ、吉林ノ治安秩序全ク舊ヨリ復ス。第二
 師團主力ハ、同市ヲ撤退シテ
 間島ニ於テハ、日華ノ衝突カ起リ、以來排日感情ハ益
 々高シク、龍井村ヲハ中國人ノ日本人ニ對スル暴
 行事件カ起リ、一部中國暴徒ハ日本人新聞賣子

加街頭の新聞ヲ賣ルルノヲ妨害シタ事能ハスル
 許リカクハ日本輕便鐵道ノ機庫ヲ爆
 破シ、局子街ノ公立學校ニ放火シタ。此等ノ暴行
 行爲ハ共產黨員ニ依リ爲サレタモノト
 言ハレテ居ル。日鮮人ハ中國人ニ依リテ虐殺
 サレカモ知レタト云フ。韓
 ニ對シテ朝鮮軍司令官ニ對シテ彼等ノ生命保
 護ノ事ト即時若干ノ軍隊ヲ派遣スルヤウ
 請願シタ。二十一日夜半以來、通信ハ杜絶
 シ間島ニ於テ此事能ハス相ヲ確メ
 ルコトハ不可能ニナツタ。安東
 府ハ十九日ニ中國ノ砲艦カ日本軍隊ノ爲ニ武
 裝解除サセタ。安東カラノ電報ニ依リテ
 若干ノ中國軍隊カ東園堡ト劉家台ト
 日本安奉線ニ對シテ盤烈ト攻撃ヲ加ヘ、電信線ヲ切斷
 シタ。安東奉天間ノ通信ハ、其ノ結果不通ト
 ナツタ。僅カ二十名ノ日本軍隊ト戰鬪
 シテ交ヘ、鷄冠山ノ鐵道守備隊ニ
 救援ヲ求メタ。一方奉天ノ日本軍當局ハ
 城内ノ平和ト秩序ヲ回復シ維持スベク
 アラユル努力ヲ傾倒シタ。中國ノ一般民衆ハ
 日本軍隊ヲ信賴シテ来タヤウナク、二十日
 カラ奉天ヲハ秩序カ殆ト平定ト通リニ
 恢復シタ。同市ノ下層階級ニ屬スル者クハ
 中國人ハ各自ノ仕事ニ復歸シテ居タ。然レ
 モ郊外ノ形勢カ不安ヲ感スル者多ク、警戒
 カナレテ居タ。二十一日ノ午後十時頃、
 中國ノ脱走兵カ再ヒ柳條溝附近ノ南滿洲
 鐵道線路ヲ破壊シヤウト企テタカ

No. 8

街頭ヲ新聞ヲ賣ルルヲ妨グシタ事能ハ思ヒタル
 計リカッタ。長谷氏ハ日本輕便鉄道ノ機庫ヲ爆
 破シ、向子街ノ公立學校ニ放火シ、此等ノ暴行處
 行爲ハ共產黨員ニ依リ爲サレタモト言ハレテ居ル
 日韓人ハ中國人ニ依リテ虐殺カレルカモ知
 レヌト云フ噂
 ニ對シテハ朝鮮軍司令部官ニ對シ、何等ノ生命保
 護ノ事、即時、若干ノ軍隊ヲ派遣スルヤウ請願シタ
 二十一日夜半以來、通信ハ杜絶シ、間島ニ於テハ事
 能ハ真相ヲ確メルトハ不可能ニナリタ
 安東方面ハ十九日ニ中國ノ砲艦ハ日本軍隊、爲ニ武
 裝解除サセタ。安東カラ電報ニ依リシ、若干ノ中國
 軍隊ハ東國堡ト劉家台ト日本安奉線ニ對シテ
 猛烈ノ攻撃ヲ加ヘ、電信線ヲ切斷シタ。安東奉天
 間ニ通信ハ、其ノ結果不達トナリ、僅カニ十名ノ日本
 鉄道守備兵ハ中國軍隊ト戦鬪ヲ交ヘ、鶴冠山ノ
 鉄道守備隊ニ救援ヲ求メタ
 一方、奉天ノ日本軍司令部ハ城内ノ平和ヲ維持シ、因循シ
 維持スベクテラ元氣カクテ倒シテ、中國ノ一般民衆ハ日
 本軍隊ヲ信頼シ、奉天ヤウタルヲ二十日カラ奉天ヲハ
 秩序カ治トテ、奉天運リニ恢復シタ。同市ノ下層階級
 三層ニシテ、中國人ハ各自ノ仕事ニ復歸シテ居タ
 然レテ、城外ノ形勢ハ不安ヲ感シ、警戒力ヲ加ヘテ
 居タ。二十一日ノ午後十時頃、中國ノ脱走兵ハ再ヒ柳
 條溝附近ノ南滿洲鐵道線路ヲ破壞シ、テ企テ、

No. 9

Defence Doc. 204-A-1

彼等ハ日本ノ鉄道守備兵ノ為ニ現場ニ死体五箇
ヲ遺棄シテ斃手退サレタ
南東軍司令官ノ要求ニ依テ朝鮮軍司令官ハ步兵
五箇大隊・騎兵一箇中隊・砲兵二箇大隊・工兵一箇
中隊等ヨリ成ル増援軍ヲ派遣スルコトニ決意シタ朝鮮
カラノ増援軍ハ十九日午後十時各々駐屯地ヲ出發シタ
彼等ハ先ヅ新義州ノ二集結シ二十一日ノ正午頃鴨
緑江ヲ渡河シ二十一日夜半奉天ニ到着シタ日本東京
ヲハ二十二日緊急閣議が開催サレ朝鮮カラノ増援軍
派遣ヲ承認シタ

1107

Defense Doc 204-A-1

朝鮮軍ハ日本ノ駐屯守備兵ニ為シ現場ニ死休シテ
 7時迄ニ業シテ駐屯守備兵
 團ニシテ軍司令部官ノ字本ニ依テ朝鮮軍司令部官ハ歩兵
 五個大隊騎兵二箇中隊砲兵二箇大隊工兵一箇
 中隊等ヨリ成ル陣境軍ニ激進スルニシテ決意シテ朝鮮
 カラノ増援軍ハ十九日午後十時各陣境地ヲ占領シテ
 信守ハ先ヅ新義州ヲシテ集結シ二十一日ノ正午頃鴨
 緑江ヲ渡行シ二十一日夜半奉天ニ到着ス日本東京
 カラ二十三日取極急ニ閣議ヲ開催シ朝鮮軍ヲ増援軍
 派遣ヲ承認シテ